



奈良文化財研究所創立60周年記念式典・祝賀会を振り返って

2012年10月18日、奈良文化財研究所創立60周年記念式典は、あいにくの肌寒い秋雨の中、近藤誠一文化庁長官をはじめ国内外から約250名という多数の方々のご出席を得て、奈文研の還暦に相応しい熱気に満ちた記念式典を挙行することができました。

はじめに、所長として「創立当時の理念を忘れず、これからも日本文化の形成の過程や特質をあきらかにし、国内外に日本文化の素晴らしさを発信していきたい」と式辞を述べたのに続き、近藤誠一文化庁長官から「東日本大震災後の混こんとした世の今こそ歴史に思いを馳せ、日本人の心を見つめる時期。奈文研の役割は、ますます重要になっていく」と祝辞をいただきました。また、佐々木平国立文化財機構理事長、荒井正吾奈良県知事、仲川げん奈良市長および奥野誠亮元文部大臣（現：奈文研特別名誉顧問）から、奈文研が長年おこなってきた文化財の調査研究や発掘調査等の功績に賞賛をいただくとともに、文化財を通じて奈文研の果たすべき役割の重要性がますます増していくことへの期待など、身の引き締まるお言葉も同時にいただきました。これらのこととは、所員の努力が高く評価されていると嬉しく思う反面、奈文研の果たすべき役割の

重大さを改めて痛感した次第です。

式典に引き続きおこなわれた祝賀会は、矢野和彦文化庁文化財部記念物課長の祝辞、坪井清足元所長による乾杯の音頭で始まりましたが、奈文研OB会を兼ねていたこともあり、和やかな雰囲気の祝賀会となりました。奈文研の歴史を紹介するスライドや、30年前に作成した平城宮の発掘風景のビデオが上映される中、鈴木嘉吉元所長、田中琢元所長、田辯征夫前所長からお祝いのお言葉と思い出話をいただきました。また、采女の天平衣装を纏った女性職員が飛び入り参加して場を盛り上げ、昔話に花を咲かせながら盛会の内に60周年を祝うことができました。

最後になりましたが、関係者や所員の皆様、大変お疲れさまでした。

（所長 松村 恵司）



松村所長の式辞



近藤文化庁長官の祝辞



松村所長と奥野元文部大臣（現：奈文研特別名誉顧問）



発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第174次）

2012年4月2日より、藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査を実施しています。6月末までの状況は前号で報告しましたので、以下では7月以降9月末までの概況をのべてみたいと思います。

本調査区の総面積は1,850m²あり、その全面に礫敷の広場を検出しました。7月以降は調査区の南3分の1ほどの部分の礫敷を除去し、下層の状況を調査しました。

礫敷の下には、朝庭部分を造営する際に大規模な整地をしています。整地は旧地形をならす目的の第一次整地、朝庭の本格的な整備とともに第二次整地、礫敷広場を整備する直前に施した最終整地です。

第二次整地土を段階的に掘り下げていくと、掘立柱建物、柱列、溝、土坑等が検出されました。掘立柱建物は調査区の西南部分に集中し、昨年の第169次調査で検出した建物と近接しています。調査区の東南部分は建物が希薄で南北方向の柱列が数条みつかりました。そのほか、直径が2.6m、深さも1mをこえる大きな土坑があり、中からは朝堂等に使用された軒瓦が出土しました。

これらの遺構のほとんどは第二次整地土にともなうもので、藤原宮造営期の遺構と考えられます。

また、調査区の北半分の礫敷を一部除去し調査を進めたところ、従来の調査で確認されていた沼状遺構の南端を検出しました。これによって、沼状遺構の規模は南北50mほどと判明しました。ただし、この遺構の性格は未だ不明といわざるを得ません。

発掘調査は10月以降も継続します。今後の展開にご期待ください。（都城発掘調査部 今井 見樹）



下層遺構の検出状況（北西から）

檜隈寺の調査（飛鳥藤原第176次）

昨年度おこなった檜隈寺の調査（第172次調査）では、檜隈寺が位置する丘陵の頂部と南東麓に調査区を設け、前者では輪竿支柱の可能性が高い巨大な柱穴を、後者では素掘溝を確認していました。素掘溝は、出土した遺物から見て古代の溝と考えられました。今年度は、この素掘溝の延長が想定される部分を調査しました。

素掘溝は今回の調査でも検出され、南から北へ流れているようです。素掘溝は、幅2.0m前後、深さ85cm以上という立派な規模であることが確認できました。水が流れた痕跡はあきらかではありませんが、増水時に水を丘陵裾側へ流すとみられる枝状に分かれる溝も確認できました。

素掘溝から出土した遺物には、6世紀末頃の土器に加えて、瓦片もありました。瓦片の多くには格子叩きと呼ばれる痕跡が確認でき、飛鳥で出土する瓦の中でも古い特徴を示しています。史跡に指定され、現地で見ることができる檜隈寺の遺構は、7世紀末頃の築造とされているので、この瓦片と素掘溝は、その前身になるとかねてより指摘されている寺院に関係しそうです。

檜隈寺の過去の調査では、同じ時期に推定される遺構や遺物がいくつか見つかっており、今回の成果も加え、前身寺院の手掛かりが徐々に増えてきました。今回の素掘溝は、その寺域を示す溝の可能性もあり、後世の耕作で北への続きは残っていないようですが、南側は望みがあります。謎に包まれた檜隈寺前身寺院、その手掛かりを将来の調査に期待できそうです。

（都城発掘調査部 黒坂 貴裕）



素掘溝（南東から）

平城京左京三条一坊一・二坪の調査(平城第495次)

朱雀門の南東、朱雀大路に面する一角は、調査前には朱雀大路縁地と呼ばれる縁地公園として利用されていました。平城京の条坊では左京三条一坊一坪にあたり、これまでの調査により坪を囲う築地塀が存在しない特殊な性格の坪として指摘されていました。

ここに国土交通省によって平城宮跡展示館(仮称)の建設が計画され、2010年度から都城発掘調査部が継続的に発掘調査をおこなっています。これまでの調査によって、奈良時代前半には一坪の北側で鉄鍛冶工房が営まれていたことが判明しました。また、奈良時代後半には鉄鍛冶工房区域は整地され広場のような利用がなされたと想定されています。そのほかにも大型の井戸や多くの掘立柱建物、一坪を南北に二分する坪内道路等を検出しています。

今回の調査の目的は鉄鍛冶工房群の範囲の確認と、一坪と二坪の境界部分の様相の解明でした。そのため南北2カ所の調査区を設定しました。北調査区の面積は693m²、南調査区の面積は1,152m²です。調査期間は2012年6月25日から10月16日まででした。

北調査区では新たに1棟の鉄鍛冶工房を検出しました。これにより朱雀門のすぐそばにまで工房区域がおよんでいたことが判明し、この地区での鉄鍛冶工房の広がりの全貌がほぼあきらかとなりました。

鉄鍛冶工房の遺存状態はそれほど良くありませんでしたが、27基の鍛冶炉を検出しました。また、鍛冶炉に風を送る装置であるふいごや、熱した鉄を敲く台である金床石^{かなじゆせき}を据え付けるための穴等も多数検出しています。

鉄鍛冶工房は庇を持つ掘立柱建物で覆われていました。工房建物の東と南には掘立柱塀が建てられており、工房を区画する施設の様相もあきらかとなりました。昨年度の調査とあわせて、炉の構造やふ



北調査区の全景(南から) 左半の一画が工房

いご・金床石との位置関係、複数の鉄鍛冶工房と区画施設・排水施設等の配置方式の全貌があきらかとなり、古代の鉄鍛冶工房の実態を知る上で、きわめて重要な発見となりました。

工房の廃棄物の出土量や鍛冶炉の作り直しの状況から、鉄鍛冶工房の操業期間は比較的短いと考えられ、奈良時代後半までは工房区域は整地されています。工房で生産していた製品は今回は出土しておらず、何を作っていたかは確定できませんでした。

南調査区では左京三条一坊一坪と二坪を区切る東西道路である三条条間北小路とその北側溝・南側溝を検出しました。三条条間北小路の路面幅は約5mで、その南北に幅約1.5mの側溝がともあります。北側溝・南側溝に堆積していた土や含まれていた遺物から、どちらも奈良時代後半まできちんと手入れがなされ、機能していたことが判明しています。

先に述べたように、一坪の周囲には築地塀等の区画施設が存在しないことが指摘されていました。今回の調査によても雨落溝等の痕跡を一切確認できなかったことから、一坪には周囲の区画施設が存在していないかったとみられます。

一坪の南側の二坪については残念ながら築地塀の版塗の痕跡は確認できませんでした。しかし、築地塀の存在が想定される位置では足場穴や築地塀の添柱穴の可能性がある多数の穴を検出しました。また、築地塀想定位置付近では大量の瓦片が出土しています。これらのことから、二坪北面には本来築地塀が存在していたものと考えられます。

今回の調査地は平城宮の正門である朱雀門に隣接する場所で、まさに当時の一等地でした。その具体像があきらかになってきたことは、平城京の実像を解明する上で大きな意味をもつといえます。

(都城発掘調査部 川畠 純)



南調査区の全景(南西から) 手前中央は復元築地塀

鹿角製のオモゲー

大分市の大友府内町遺跡から出土した用途不明の鹿角製品を見た時、南島でオモゲー、江戸時代には拍子と呼ばれた馬具と確信した。^{「つま」}をくわえさせず、馬の両頬を挟み込む木製の馬具は数多く伝世しているが、鹿角製の考古遺物として初めての出土例であった。

オモゲーとは、左右一对の鹿角の加工品でウマの鼻面を挟み、上部の孔で左右を繋いで固定し、中央の2つの小孔から後頭部に紐を廻してずり落ちないように固定し、下部の孔を締めたり弛めたりして御者の意思を伝えてウマを制御する道具。下端の可動部に力がかかり、破損しやすい。銜に比べてウマへの負担が軽く、駄馬用に広く使われたと思われる。

(埋蔵文化財センター 松井 章)



出土した鹿角製のオモゲー(原寸大)



原図：『石山寺縁起絵巻』

オモゲー(左上)と、同じく出土したヘラ状鹿角製品(右下)
オモゲーの表面には装飾や穴をあけるなどの加工が見られる
ヘラ状鹿角製品は、鹿角を平坦に磨いてバチ状に整形したもので、
弦楽器のバチであった可能性がある。

奈良文化財研究所創立60周年記念講演会を開催

奈良文化財研究所は、専門を異にする研究者が実際に即した文化財の総合調査をおこない、その研究成果を文化財保護政策に役立てるために、文化庁の前身である文化財保護委員会の付属機関として、1952年4月1日、文化財の宝庫である奈良の地に設立されました。

本年で創立60周年的節目を迎えることを記念し、10月6日に、東京・一橋大学一橋講堂で「遺跡をさぐり、しらべ、いかす—奈文研60年の軌跡と展望—」と題して、10月20日に、なら100年会館で「日中韓 古代都城文化の潮流 奈文研60年 都城の発掘と国際共同研究」と題して講演会を開催しました。

東京会場では、平城宮跡等のこれまでの発掘調査の成果、考古学や保存科学への先端の科学技術の導入、遺跡の整備やマネジメント、更には歴史学の基盤をなすものとして着実に取り組んできた奈良の寺社の古文書調査、また、文化遺産の保護に対する国際的協力について講演をおこないました。

奈良会場では、奈文研が中国社会科学院考古研究所、韓国国立文化財研究所との間で継続しておこなっている、日・中・韓の古代都城に関する組織的な国際共同研究の成果を、それぞれの第一線で活躍する研究者が、日本、中国、韓国であきらかにされつつある古代都城文化の豊かな実情を報告し、その後、国際共同研究事業の成果等についてパネルディスカッションをおこないました。

また、講演会にあわせ、「写真で見る奈文研60年史」として、これまでの奈文研の調査・研究の取組、中国、韓国との国際共同研究の成果等を写真パネルで紹介しました。
(連携推進課 田中 康成)



講演会風景（東京会場）

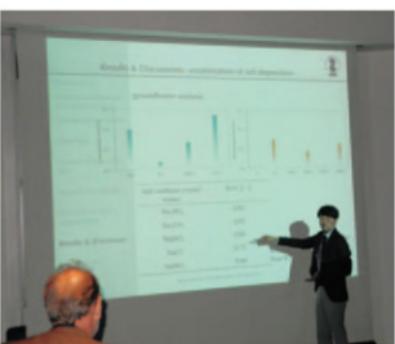
コロンビア大学との研究交流

奈良文化財研究所は、2011年からニューヨーク市のコロンビア大学中世日本研究所並びに建築・計画・保存大学院と、研究協力および交流をおこなっています。コロンビア大学は1754年に創立された全米で5番目に古い大学で、様々な分野で高い水準の研究がおこなわれています。昨年に引き続き、今年も奈文研から2名の研究者が現地へ赴き、研究成果を発表し、コロンビア大学の先生方や学生と議論を交わしました。

発表は、9月25日の夕方から、コロンビア大学のエイヴリー・ホールの一室でおこなわれました。まず、平澤毅遺跡整備研究室長が、“Protection of Places of Scenic Beauty (Meisyo／名勝) in JAPAN”（「日本における名勝の保護」）という題目で話をしました。続いて、脇谷草一郎保存修復科学研究室研究員が “Study on Heat and Moisture Movement in Openly Exhibited Soil Structural Remains”（「露出展示された土質遺構における熱・水分移動に関する研究」）という題目で発表しました。

それぞれの発表の後におこなわれた質疑応答では、文化財の保護制度や保存技術等について議論が交わされました。プログラム終了後には、ワインとチーズによる歓迎会が開かれ、和やかな雰囲気の中で、引き続き意見交換がおこなわれました。

コロンビア大学との研究協力および交流では、協力体制を強化しながら、今後も2015年度まで毎年2名程度の研究者が奈文研から現地へ赴き、日本の文化財研究の様々な成果を発信していくことになっています。
(文化遺産部 青木 達司)



発表の様子

光の回廊2012－甦る古の記憶－

2012年9月15日～16日

光の回廊は、明日香村中がロウソクの優しい灯で包まれる毎年恒例の行事です。飛鳥資料館では今年、照明・映像・音響・ダンスを絡めた新たな演出を試みました。

会期の両日は、前庭で2,000個のロウソクに明かりが点されました。さらに、資料館の建物は様々な色に変化するLEDによって鮮やかに彩られ、前庭の木々もライトアップされることで、飛鳥資料館が光の祭典の会場となりました。また、これまでに撮りためてきた、飛鳥の遺跡や奥飛鳥の自然等の美しい映像を会場で流し、資料館を包む心地よい音楽とあわせ、新たな飛鳥の空間を表現しました。

16日には、元格闘家の須藤元気さん率いるダンスユニット「WORLD ORDER」が出演しました。彼らのプロモーションビデオの撮影地には、世界の遺跡や歴史的建造物が選ばれる等、歴史との関わりが深いことが知られています。彼らのダンス・照明・映像が光の回廊とコラボレートし、前庭が幻想的な空間へと変貌を遂げました。16日の公演には1,500人以上の方にお越しいただき、公演後にはボランティアの両親会とともにナイトミュージアムを館内でおこないました。終了後には、多くの方から飛鳥への興味・歴史・文化への理解の声、感謝の手紙等が寄せられ、光の回廊を通じて飛鳥の歴史や文化に親しんでいただけたと思っています。

当館は奈良文化財研究所の研究成果を公開するだけにとどまらず、今後とも幅広いお客様に、飛鳥に親しんでいただける場を創意工夫しながら作っていきたいと考えています。

(飛鳥資料館 成田 聖)



光の回廊2012の会場の様子

中央アジアの人々と遺跡を探る

カザフスタンはロシアの南、東は中国に接し、西はカスピ海に至る非常に大きな国です。シルクロードといえば、砂漠や荒野が続いているイメージですが、アルマティ空港に降り立つと、車や人の多さ、物資の豊富さは日本とあまり変わりがなく、その発展ぶりには目を見張ります。

9月18日から26日まで、東京文化財研究所に協力する形でユネスコ日本信託基金シルクロード支援事業による国際ワークショップに参加しました。奈良文化財研究所からは森本晋国际遺跡研究室長と私が参加し、中央アジア各国の研究者に遺跡探査の方法についての紹介と利用方法についての解説をおこないました。

今年はワークショップの2年目にあたり、カザフスタンでは機材を購入し、基本的な計測方法や解析の理解は充分でした。このため、初年度とは異なり、より実践的な内容を中心に、講義と遺跡での実際の計測を実施し、ソフトウェアによる解析や、成果についての討論をおこないました。地中レーダーは道路下の配管の確認から資源探査まで多くの分野で利用が進む技術ですが、遺跡の情報を得るためにも、それにあった方法を確立する必要があります。ともに試しながら日本での経験を伝えることで、土地や対象に応じた方法を試行錯誤することの大切さを感じもらいました。

参加者の多くは20～30代の若者達で、時間を超過しても質問攻めにあったのは昨年と同じでした。数年後、どこかで彼らの成果を拝見することを楽しみにしながら、彼らに笑われないように研究しないと、と氣を引き締めて日本へ戻ってきました。

(埋蔵文化財センター 金田 明大)



カザフスタンにおける探査風景

飛鳥資料館の秘蔵物(3) 武人像

飛鳥資料館のロビーには、**甲**を身にまとった厳しい姿の武人が現在展示されています。この像は「武人君」という愛称で飛鳥資料館では親しまれています。

彼は、壬申の乱で戦ったであろう武将の姿を推定復元したもので、身にまとっている甲は飛鳥寺の塔心礎に埋納されていた鉄製の挂甲を参考としています。同時に展示している飛鳥寺に埋納された挂甲の出土状態のレプリカとあわせて見るとわかりやすいのではないかでしょうか。

武人君は、展示や移動するにも学芸員が一苦労するほどの重装備です。鉄製の甲を身にまとい、弓を構え、大刀をはじめとする様々な装備品を腰に下げていますが、これほどの装備は古代に末端の兵士にまで行き届いていませんでしたので、まさに「武将」クラスの装備品といえるでしょう。

来館者の方々には、イメージするのが難しい古代人の姿がつかみやすいとなかなか好評です。

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで、年末年始・月曜休館）お問合せ：☎0744-54-3561（飛鳥資料館）



（飛鳥資料館 成田聖） 復元された武人の姿

平城宮跡資料館 展示紹介 宮殿復原展示コーナーの調度たち

今年の正倉院展で16年ぶりの展示が話題となった瑠璃坏。めったにお目にかかるない正倉院宝物の数々を、資料館では（模造品ではありますが）、宮殿の寝室・書斎・居間・食卓の空間に、インテリアとして配置しています。

屏風、御床、厨子、双六、囲碁、琴、ガラス器は、正倉院宝物の実際の大きさ・形のままに再现。絨毯や几帳の柄は、正倉院宝物の生地模様を参考に作りました。

これら調度の傍には、平城宮・京から発掘された鏡、檜扇、櫛・かんざし、琴柱、動物を模った硯等、高貴な出土遺物も並んでいます。地上と地下に遭された宝物の共演をお楽しみください。（企画調整部 渡邊淳子）

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで、年末年始・月曜休館）お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）



宮殿コーナーと食卓におかれた瑠璃坏(右)

■ お知らせ

飛鳥資料館 冬期企画展

2013年2月2日(土)～3月3日(日)

「飛鳥の考古学2012」

■ 記録

文化財担当者研修

○保存科学基礎I（金属製造物）課程

2012年10月2日～10日 6名

○保存科学基礎II（木製造物）課程

2012年10月11日～19日 6名

○遺跡情報記録調査課程

2012年10月23日～26日 9名

○土器・陶磁器調査課程

2012年11月12日～16日 17名

○文化財写真課程

2012年12月4日～14日 15名

○報告書作成課程

2012年12月14日～21日 24名

現地説明会

○飛鳥藤原第174次発掘調査（藤原宮朝堂院朝庭）

2012年11月23日 460名

飛鳥資料館 秋期特別展

2012年11月1日～12月2日

「花開く都城文化」 5,743名

平城宮跡資料館 秋期特別展

2012年10月20日～12月2日

「地下の正倉院・平城宮第一次大極殿院のすべて」 20,356名

特別講演会【東京会場】

2012年10月6日 400名

日中韓国際講演会

2012年10月20日 300名

第111回公開講演会

2012年11月3日 200名

■ 最近の本

○箱崎和久

「奈良莊紙の白鳳寺院 山田寺」シリーズ「遺跡を学ぶ」第85巻
新泉社 2012年11月

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.go.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2012年12月